

第1回香川菊池寛賞受賞作品

花ノ根村合財録

守川 慎一郎

(一)

花ノ根村といえは、もちろん古い呼称であつて、いまは何やらしかつめらしい村名の下に、ただ花ノ根という地名だけがつく。

東と西に切り迫つた尾根があり、北の山ふとこ

ある。

この二百戸の人家を四つに仕切る区分がある。

溪谷の中ほどにかかつた橋から上流をカミ、

下流をシモ、上流の東側をカミノヒガシ、西側

をカミノイリ、下流の東をシモノナガレ、西をシ

モノカミと呼ぶ。シモノカミなどというのは、ど

だい笑止なる地名であるが、これは谷川の

大川の流れていえばシモノナガレの上流にある

ことからいふのであつて、この花ノ根村からすれ

ば無理からぬ名づけかたなのである。

る深く発した溪流が南の大川にそそぐまで、およそ一里半のうち一里足らずの流れ沿いに二百戸ばかりの人家が点在する。

朝日はおそく、夕日は早い。このような日照時間の少ない地形の中に、どうして人が住みつくにいたつたのか、村史もそこまではつまびらかでない。その村史たるや、産土神社に隣接する神宮寺に伝わる和綴じの一小冊子を指すのみで、筆者はおろか記述内容まで、なにほどの真憑性があるものやら、官司、住職ともに確信を抱かないので

こう地名を説明しても、ピンとこないかも知れぬ。簡単にいへば、理由の由という字である。真中のタテ棒が谷川だ。右のハコ二つが上からカミノヒガシ、シモノナガレ、左が上からカミノイリ、シモノカミと記憶してほしい。

戸数別にして最も大きいのはシモノナガレで八十余戸、ついでシモノカミ五十二戸、カミノイリ三十九戸、カミノヒガシ二十五戸といった順だ。

シモノナガレに人家が多いのは谷川と大川の

合流点から下が比較的ひらけた平地になっており、住みやすい地形なのが自然のなりゆきで、カミノヒガシに人家が少ないのはその全く逆であることしか理由は考えられない。

シモノナガレに裕福な家が多いのは、やはり耕作面積の広さからいって当然なのだが、カミの住人にいわせると、大水のたびにナガレのごうつくばりどもが、カミから流失した財物を下流でかすめとるからだという。しかし、こう非難する根拠は何もない。いまやカミの家々は流れより遙かに

ら出ることは、これまで一度もなかった。これからもしばらく出ることにはありそうにもない。シモノカミ五十二戸というのは、ことほど左様にまとまっていたのである。シモノナガレは住人の多さからして、まとまれば当然毎回出るはずなのだが、いろいろな勢力が拮抗してまとまらぬことが多い、カミノイリの頭だつ者に投票したりして、その者が当選するということになることがあったのだ。

カミノヒガシから出ることがないのは、ここの

山手に建っており、もしこれらカミの家から財物が出るほどの大水が出たとすれば、シモの家は残らず土台ごと流失してしまいうからだ。しかし、カミの住人のこの確固たる信念に満ちた悪口は先祖代々語りつがれてきたもので、抜きがたい根強さを持っている。

花ノ根村から村議会議員が二人出ている。シモノカミからの一人は改選ごとに確実に出る。しかしあとの一人はシモノナガレから出ることもあり、カミノイリから出ることもある。カミノヒガシか

住人はほとんどが自営の炭焼きか雇われ杣夫で、自営の炭焼きには自分から村議会に出ようなどと考える者はおらず、雇われ杣夫はたいいナガレかシモノカミの山持ちという旦那を持っていて、投票はその旦那のいうがままなのである。この花ノ根が四つに区分されている以上、それぞれに代表的な人物がいる。大部分は長老会議のメンバーだが、それには加わっていない人間もいる。

長老会議が生まれたのはずっと古い。花ノ根村

村議会が生まれる前から村の諸事を決定するに
いて参与してきた。村議会ができてからは長老
会議は自然消滅していた形だったが、市町村
合併が促進され、花ノ根村がもう一つ大きな村の
一地区となるに及んで、また生まれなおした。

昔から長老の家柄という血筋は決まっていた
が、そのうえに、旧花ノ根村議会議員、村三役、
地域の代表と認められる人物が加わって再編成
されたのである。旧村議会の人員より人数はふえ
た。長老の家筋でない者も少なくない。いわば

花ノ根村に「二本松の茶づけ」という俚諺があ
る。腹八分に食ったあと、ちよつとお茶づけで
満腹感を味わおうとするのはよくあることだ。

子供でも同じである。藤八の父は子供がこうした
お茶づけを要求すると、きまってポカリとやる。
子供はゲンコをもらいたいわけではないから、も
う一度要求をくり返す。こんどは鈍豆ぎせるでコ
インとやる。見る限りにおいてはゲンコの方が
派手だが、やられる分には鈍豆の方が格段に痛い。
子供たちはお茶づけとはかくも痛きものかと

花ノ根運営実行委員会といった性格を持っている。
こう書くと、この花ノ根は全く民主的な評議
機関を所有しているかに考えられようが、なか
かどうして、むずかしいのである。

まず、シモノナガレでは、二本松の藤八である。
先々代まではカミノヒガシのキコリだったが、
藤八の父の代になって財産をつくり、いまでは
花ノ根村屈指の分限者である。藤八にまつわる話
もいろいろあるが、まず藤八の父が身上づくりに
あたっていかなる努力を払ったかの一端を記述し
ておこう。

条件反射を身につけ、ついには要求しなくなる。
これが二本松の茶づけである。

藤八が子供のころはこうした茶づけをくらって
育った。だからといって現在もそうしたやり方が
続けられているとは考えられないことなのだが、
花ノ根村では、めしが足りなくなると「もう二本松
の茶づけしかない」という。

花ノ根には、食事どきに他人の家を訪れないと
いう日本的な習慣が固く守られているため、藤八
の家で痛い茶づけがまだやられているかどうかは

確かめた者がないのだけれども、そうしたいい方、見かたをすることによって俄か分限者への嫉妬をいくらかでも解消しようとするのである。

藤八は左脚がビッコである。これは大水のときに流される材木を引き揚げにいつて流木に衝突され骨折したのが原因だ。これが事実である。

しかし、花ノ根村でこの藤八の不自由な左脚を話題にするとき、こうした事実だけが語られることは全くない。

カミノヒガシとかカミノイリでは切り出してき

ところが、キコリの中には、その日の気分によってか、ついうっかりしたふりをして烙印を打たずに済ませる横着者もいる。山持ちの性格によつて、切り出してきた片っぱしから烙印を押さねば気のすまない者もいれば、まとめて打たせるものもいる。いずれにしろ烙印のない材木が流れることも少なくないのである。

ナガレやシモノカミの者は、そうした材木を拾うのが一つの役目であり義務であり、しばしば

た杉材だの桧材を、傾斜した山肌に打ちこんだ杭木を支えに高く積んでおく。これが台風などのおりには崩れて谷へ流れ出す。ふだんならすぐ下流の岩などに引つかかるほどの水量しかないのに、大水になるとこれら材木はまるで考えもなく大川まで突ン流れ、さらにまた大川の下流へ逃げしてしまうのである。

山持ちたちは杣夫や雇い人に命じて木口に屋号の焼き印を打たせてある。どこまで流れていっても、その烙印さえ見れば自分のところの材木であるのは村の財産を守るといふ素朴共同体の自衛措置であるからだ。役得とは、引き揚げた烙印のある材木について一石あたり幾らという謝礼の山持ちからもらうということだけでなく、無印の材木なら自分のものにしてしまうこともできるのだ。

大水のときナガレやシモノカミの住人は、大川の堤を見まわることと主目的に川つぶちへ出かけるのだが、流れてくる材木が目につくと、水防の

業務ぎようむはそつちのけにして材木ざいもく拾ひろいに精せいを出だすこと
も多おおかった。

カミの住人じゅうにんが、シモでは財物ざいぶつをかすめとつたと
考かんがえる裏うらには、こうした歴史的れきしてきじ事情じようがあるにはあ
る。さて、藤人とうはちがビッコになったとき、無印むじるしの材木ざいもく
を見つけた彼かれが喜よろこび勇いさんで鳶口とびぐちで引ひき寄よせたた
めに木口こぐちがもろに左脚ひだりあしに衝突しやうとつしたという。まこ
としやかなだけに、とんでもないつくり話はなしではあ
るまいか。

(以上6月25日放送分)